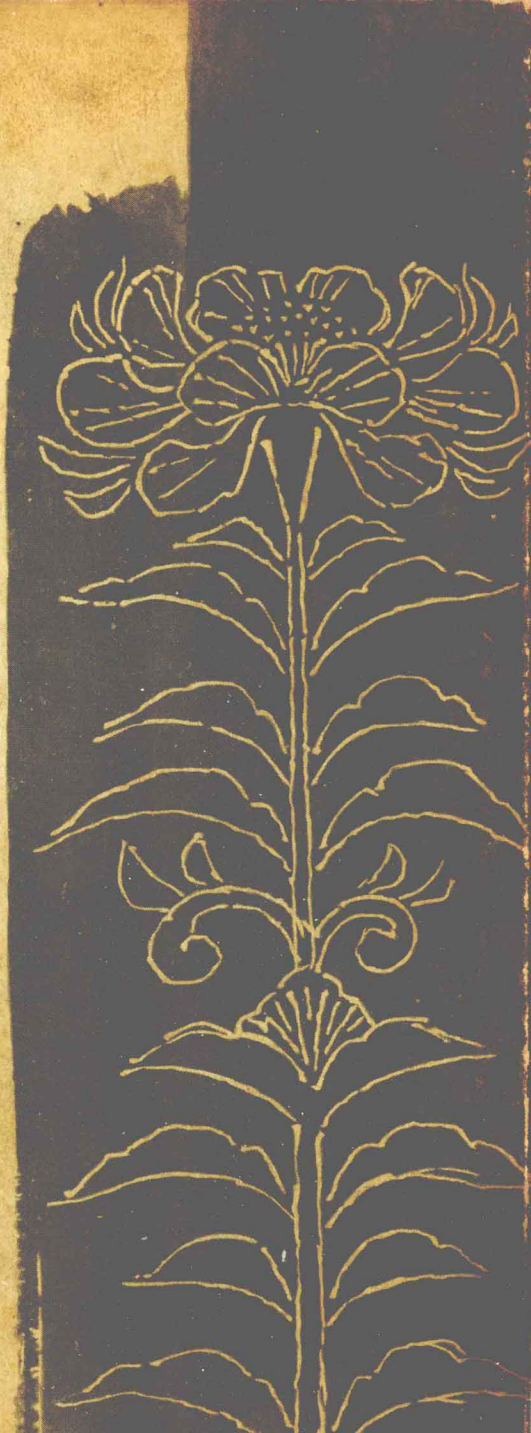
松平長七郎浪花日記



著者の諒解により
検印廃止

落丁・乱丁の場合は
お取りかえ致します

1963©

松平長七郎浪花日記

昭和三十八年十一月一日　印刷
昭和三十八年十一月五日　発行

定価　四百五十円

著作者　村上元三
発行者　矢貴東司
印刷者　小泉輝章

発行所　株式会社　桃源社

東京都中央区日本橋蛎殻町一ノ一二
電話（六七一）四〇〇一、二番
振替東京六四三五一番

松平長七郎浪花日記

村上元三

目次

竜虎劇……七
ぎやまん燈籠……八七
黄金鬼……一五六
箱根八里……二三三
海坊主……二八九
獅子ヶ嶽……三五五
国姓爺旋風……四二二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

裝幀　中　一　弥

松平長七郎浪花日記

竜虎剣

山王祭

それは、白昼の、ことに天下祭といわれる山王祭の当日の捕物だけに、なおのことすさまじい騒ぎになってしまった。

祭礼には喧嘩口論はつきものであり、町奉行所でも固く取締っていたのだが、この時の起りは、ただの喧嘩ではなく、女のことが因の刃傷であった。

江戸での天下祭、幕府が特に氏子の町人たちに命じて祭事をさかんに行わせるところから、御用祭とも呼ばれているのは、この山王祭と、もう一つは神田祭のことをいう。

永田馬場にある山王権現の大祭は、一年おきに、六月十五日に行われる。この祭が行われるようになったのは、慶長のはじめ頃からであり、神田明神の大祭とは一年交代になっている。

山王権現の氏子は、京橋木挽町から西の各町と、八丁堀、霊岸島一帯をふくんでいるので、祭り好

きな江戸つ子のことだけに、当日はさかんな賑わいになる。
江戸城内でも月次の礼を取りやめ、市中では武家町屋とも桟敷を構え、幕を張り、客をよんで御馳走をする。
神輿、神馬などの行列に加えて、四十五番もの山車が山下門を出発し、町々を練つて茅場町のお旅所に至り、ここで一休みしてから元の本社まで戻るのだが、その沿道は人の垣をきずき、江戸中の人間がほとんど集まつたような賑やかさであつた。
この正保四年の六月十五日は、例年の通りのさかんな山王祭が行われ、南北町奉行所や寺社奉行所からも警戒の役人たちが出て、混雑を整理していた。
暑い夏の日ざかりで、雲一つない空から、ぎらぎらと陽の光が降りそそぎ、行列の人々も見物も、暑さでゆだるようになつていた。
ちようど、四十五番目の、牛若丸と僧正坊の山車が通りすぎ、供奉がつづいて、京橋の盛り場、中橋広小路の辻を通過した直後のことであつた。
「喧嘩だつ」
広小路に面した料理屋から、すさまじい男女の悲鳴と金切り声が起つた。
わあつ、とか、きやつとか名状し難い声が聞え、その店から、顔色を変えた男女が、祭見物の晴着が乱れるのもかまわず、先を争つて逃げ出してきた。
「人殺しだつ」

「誰か、早く、お役人を」

と、口々に叫ぶ声も、こつちへ駈け集つてくる弥次馬の喚き声に消されて、言葉になつては聞えない。

そこは、うつぼ屋という古い料亭で、刃傷のあつたのは二階だつた。

祭礼を二階から見物するのは禁じられているので、店の者も大ぜいの客も、階下に集つているうちに、二階でそのさわぎが起つたのだという。

まだ芸者などもいない時代だが、ほかの料亭と同様、このうつぼ屋でも、下女という名目で、客の座敷で酌をする女たちを何人も抱えていた。

その中に、お福という女がいたが、これがいい器量ながらなかなかの手どりで、自分を張つてくる男を何人も手玉にとつている中に、五島佐仲という三十年配の浪人がいた。

浪人の居住の、ことにやかましい江戸だし、五島佐仲は何をして暮しているかわからないが、一かどの剣法者であり、金放れもいい。

このところ、お福は佐仲がしつこいので厭気がさし、振りつづけているうちに、今日、佐仲はどこかで祭り酒をのんできたのか、顔が真青になるまで酔つて、うつぼ屋へ入つてきた。

何か乱暴をされるといけない、というので、うつぼ屋でも佐仲を二階の裏座敷へあげ、お福に酌をさせているうちに、いきなりお福の悲鳴が聞えた。

あわてて、ほかの女たちが二階へ駈けあがつてみると、佐仲が、血刀を片手に、ぬつと廊下へ出て

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くるところだつた。
「お福は言語同断の奸婦ゆえ、斬り殺した。この上は、ここの店の者、残らず皆殺しだ」
もう半分は正気を失つているらしい佐仲が、そう喚くのを半分まで聞かず、女たちは、転がるように段梯子を逃げおりた。
それから大さわぎになつたのだが、二階には佐仲のほか客はいないのに、あいにくと、このうつぼ屋の娘、おえんという六つになる女の子が、誰も気のつかぬうち二階へあがつて、さつきから祭礼の山車行列を見物していたのだつた。
「人殺しだつ」
「早く、お役人を」
階下で、みんながさわぎ立てるうちに、料理場の血気の男たちが四五人、めいめい棒などを持つて、段梯子を駈けあがつて行つたが、わつと悲鳴が聞え、二人ほどが、血まみれになつて転げ落ちてきた。
段梯子の上り口に、五島佐仲が、大刀を右に、左脇に小さいおえんを引つ抱えて、のそつと立つている。
もともと背の高い、ふだんから青い顔色をした佐仲だが、その時の佐仲は、まるで青鬼そのもののような形相であつた。
「上つてきたら、みんな斬り捨てるぞ、おれは人質を取つている。この子を助けたいと思うのなら、

逃げ路を開け」

と佐仲は喚き立てた。

うつぼ屋の主人夫婦は、小さいおえんが人質に取られた、と知ると、

「あぁつ、あの子が」

「おえんを助けて」

気狂いのようになつて段梯子を駈けのぼろうとし、ようやく奉行人たちに引きとめられた。

うつぼ屋にとつて、なおのこと不運なことには、裏梯子のところは修繕をしていて使えず、二階へあがるのは、この正面の段梯子ただ一つだけだつた。

このさわぎは、祭見物の人々が雑踏している中橋広小路一帯に伝わり、弥次馬が駈け集つてくるし、警固の役人たちも、六尺棒を抱えて駈けつけてきた。

山王祭の当日だけに、南町奉行、神尾備前守、北町奉行、朝倉石見守、双方の組下が繰り出しているので、大道中での喧嘩なら直ちに取り鎮めるが、こういう刃傷沙汰は、役人にとつても思いがけない事件だつた。

下手人の浪人が、小さい女の子を人質にしているので、うかつには飛び込めない。

それでも、同心たちが数人、段梯子を駈けあがつて、

「乱心者め、神妙にせい」

「御用だ」

十手や六尺棒で打つてかかるのを、五島佐仲という浪人は、あざやかに二人ほどを、段梯子の下へ斬つて落した。

一方、ほかの役人たちは、表の街路から二階の手すりへ梯子をかけ、それを伝わつて二階へ飛び込もうとした。

佐仲は血刀を振りかぶりながら、その梯子を手すりから、どんと突き放した。

「わつ」

声をひいて数人の役人が、梯子ごと下の道へ落ちていつた。

「おのれたち」

と佐仲は、もう死んだようにぐつたりしているおえんを左脇に抱え、手摺に片足をかけ、

「この上かかつてくると、この子供、一突きだぞ」

喚いて、刀の切先をおえんの小さなのど首へ突きつけた。

「ああつ、おえんが」

「あの子を、あの子を助けて下され」

下の街路で、このうつぼ屋のあるじ夫婦が、わが子の危急に、声をふりしぼつて泣き叫んでいる。

佐仲の形相は、もう狂人も同様だつた。

役人たちも、この上うつかり飛び込めば、子供のいのちがないと思うので、

「水、水をかけよ」

「竜吐水を運んで来い」
などと叫び合いながら、街路を走り廻るだけだつた。
そのあいだに佐仲は、おえんを小脇に抱え、血刀を右にさげて、手摺から屋根の上へ出ると、そのまま屋根を伝わつて、ひらりと隣家の屋根へと飛び移つた。
「逃げるぞ」
「囲め、囲め」
役人たちが呼び交しているとき、うつぼ屋の向い側の弥次馬の中で、かん高い声をあげている女がある。
「ぐずぐずしてたら、おえんちやんが殺されるよう。これだけ男がいて誰も助けられないのかい」
それは、中橋広小路の横丁で、江戸紫という料理屋をやつているおれんという女だつた。
自分では二十二だといつているが、本当は二十四、五になるらしい。大柄で、色が白く、肉づきもいい。眼がきわ立つて大きく、派手な顔立ちをしているので、若く見える。
江戸紫という、あまり大きくはないが、三カ月ほど前から、ともかく一軒の料理屋を女手一つで切り廻している女であり、男がついているに違いない、と人は思つているが、おれんは自分で男嫌いだといつている。お節介やきが調べてみると、亭主とか旦那とかいつた者はなく、本当にひとり身らしい。
おれんの前身は、誰も知らない。以前は、女だてらに男たちを顎で使つていた掏摸の女親分だつた

という噂もあるが、それも本当のことはわからない。
ともかく、気つぷのいい女で、今日のようなお祭のときは、町内の世話をよく見るし、お神酒所へは酒をどんどん運ぶし、町内でも評判がいい。
酔つ払つた時など、いい心持そうに、
「あたしには、天下一の親分がついてるんだからね。何が来たつてこわい事があるものか」
よくそういうが、おれんの親分とは何者なのか、誰も知らなかつた。
「何をしてるんだよ。さつさとあの浪人、取つ捕まえちまえばいいのに。ぐずぐずしてると、おえんちやんが殺されちまう」
今朝から祭酒をのんで、いい心持でいるらしく、ぼうつと眼のふちを染め、おれんは金切声で、役人たちを叱りつけている。
「早く梯子をかけて、屋根へ登つたらどうだい。何をぐずぐずしてるのさ」
それを耳にしたらしく、向う鉢巻に十手をさげた町奉行の同心のひとりが、前を走つて行きかけて足をとめ、むつとした顔になると、
「黙れ、この女め。子供を助けたいと思えばこそ、われらも苦心しておる。要らざることを申すな」
「だつて、ごらんなさいよ、あの気狂い浪人め、あれあれ、ほかの屋根へ移つちまつたよ」
「わかつておる。黙つて引つ込んでおれ。この上何か申すと引つくくるぞ」
同心もむかつ腹を立て、どなりつけて走り去つた。

「何を言つてるんだい。さつさとしないと、おえんちやんが大変だよ」
わあわあ騒いでいる弥次馬の中で、おれんの声が一ばん大きい。
屋根の上の五島佐仲は、もうつぼ屋から三軒目の生薬屋の屋根へ移つて、左に小さなおえんを抱え、右手に血刀をさげたまま、下の騒ぎを見おろしている。
「竜吐水はまだか」
役人たちが、血眼になつて叫んでいる。
竜吐水の水を屋根へかけ、佐仲の足をすべらして召捕ろうという戦法だが、佐仲も、それは計算に入れている様子だつた。
「のぼつて来い、これへ。その勇気がなくば、道をひらいておれの逃げ路を作れ。さもないと、この子供を一突きにするぞ」
と佐仲は喚きながら、次の屋根へ飛び移る身構えをしている。
そのうしろのほうから、数人の手先が屋根へ梯子をかけ、じりじり追つていつた。
それも佐仲は、ちやんと知つているらしい。
下を見おろしながら、眼の中にせせら笑いを浮かべている。
「御用だつ」
いきなりうしろから、手先のひとりが、十手をふるつて飛びかかつた。
わずかに足を引いたきり、佐仲は、無言で、刀をふるつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com